

子育て支援リーダー養成講座 第6回

講演 「発達障がいの子どもと親への支援と連携のあり方」
星山 麻木 明星大学教授

1. 発達障がいとは

- *障がい児＝特別な支援を必要とする子ども
(Withoutでなく Children with special needs)
障がいと健常は限りなく連続性の中にあるので、境界線は揺れ動く
障がいをマイナスのイメージと捉えない（グレーゾーンといわない）
発達に偏りがある（得意なことと不得意なことの差が大きいと捉える）
- *支援＝障壁を取り除く（ささやかでよいから自分でできることを）
できるだけ早期に障がいを発見し、サポートを開始することが大切
- *親は障がいを認めたららない→支援の遅れ→自立の遅れ
母親が自分のネットワークを築くサポート
記録によるサポート（親の心のコントロール・丁寧に・根気強く・安定して）

2. 発達障がいを持つ子どもへの具体的支援

- ①自尊心を育てる・認め合う
できないことを特訓しても無意味→得意なところを伸ばす
結果（できる・できない）でなく、存在そのものを認める
お母さんをほめることにより、お母さんの心が子どもに向かう
傷ついているときこそ、豊かな心を
- ②長い間いる集団の中で認められる経験をさせる
子どもは子どもの集団の中で認められることが必要＝集団を育てる必要
多様な見方ができる集団にする
- ③発達の偏りに対する見方 「みんな違ってみんないい」
オーダーメイドの教育計画（個別の支援計画）
- ④行動論による支援（ごほうび）
先行刺激→行動→行動（促進に働く行動刺激をする。抑制はダメ）
例）低学年 シール、
高学年 ほめる（君に会えて嬉しい、君を誇りに思う）

3. よりよい支援をするために

- ①地域全体でサポートする体制づくり
偏見をとりのぞく
大人がつながる
- ②早期発見・早期支援のために
お母さん同士を繋げる、ほめる、
ほめぐせをつける
- ③子どもの先行ガイド ポリウムカード
・インディアンのテント

